



# 記憶の風化

全国市議会議長会  
事務総長 井原好英

東日本大震災から6年余、熊本地震から1年余が経過した。東日本大震災では、早くも「記憶の風化」が話題になっている。先日、仙台市周辺の被災地を訪れる機会があったが、旧荒浜小学校を震災遺構保存として整備するなど、「風化させてはならない」との声が多く聞かれた。

仙台平野では、過去にも貞観11年（869年）に、地震と地震に伴う大津波で大きな被害を受けていることが、日本三代実録に記録されている。以前は、相当誇張して書かれているのではないかと考えられていたが、今回のあの津波を見た後は、実際に体験した人の記録を踏まえたものと思われ、簡潔な中にも臨場感あふれる記述であることが実感できる。

また、仙台市に隣接する多賀城市の「末の松山」は、貞観津波でも波が越えることがなかった歌枕として知られており、百人一首にも、清少納言の父である清原元輔が詠んだ「契りきな かたみに袖を 絞りつつ 末の松山 浪こさじとは」が、採られている。末の松山は、訪れてみると、海岸から2キロほど内陸の、とてもこんなところまでは津波は来ないだろうと思うような住宅地の中にある、標高10メートル程度の小高い丘である。今回も、丘のすぐ下の道路までは1.8メートルの津波が押し寄せたが、末の松山を波が越えることはなかった。

仙台平野の貞観津波の痕跡は、直後の延喜15年（915年）に十和田火山の噴火があったため、特定しやすい形で比較的よく保存され、東日本大震災前から確認も進んでおり、今回の津波の浸水域とほぼ重なっているようである。また、慶長16年（1611年）には、慶長三陸地震・津波があり、仙台藩の記録や仙台市の浪分神社などが言い伝えとともに遺されている。このような過去の記録や伝承・遺跡などの教訓が十分に活かされなかったとの思いも、記憶の風化がいわれる背景の一つにあるようである。

震災の記憶の意味は、単に知っているだけでは十分ではなく、過去の災害を教訓とし、街づくりなどに役立てるとともに、防災教育や防災訓練により、とっさの行動がとれるようにして、災害を再び繰り返さないことが最も重要である。すでに記憶の風化がいわれるのは、時の経過とともに、このことが簡単なようでなかなか難しいことを意味しているのであろう。

南海トラフにおける巨大地震による津波が想定される地域はもちろん、各地域においても、それぞれの地域の歴史を振り返るとともに、この今次の大震災の貴重な「記憶」を共有し備えることが、極めて肝要であると思う。